

色彩の学習からポスターの学習へ

山瀬晋吾

1. はじめに

「色彩構成板」という教具がある。15年前、日本色彩社から発行された「動く掛図」である。色彩の基礎や機能の学習が感覚的に興味深くできるということで、当時この種の教具としては画期的なものであった。筆者も長年この教具を愛用して来たが、最近色褪せてもきたので買いかえようとして同社に電話した。「もう先生方からの需要がないので絶版にしました。」との返事である。需要がないということは、改良されたものができたのかと聞くとそうでもないらしい。結局在庫あと2つといううちの1つを送ってもらったが、待てよ、このまま続けていいかなという不安がつきまとう。しかし長年使い慣れたものを簡単に捨て切れないのが人情である。

豪雪もすっかり解けて新しい56年度を迎えた。机の上に積み重なる各社教材カタログの中から日本色研の「配色パネル」を見出した。「色シートを自由に動かしながら、配色を考えられる理想的指導備品。体裁 両面スチール製パネル（白、グレイ 5cm眼入り 90×60cm）マグネット付色シート 69色 107枚付 実用新案申請中」とある。日本色彩社に電話した時、マグネット式のものが出ても良い頃だがとも云っていた。早速注文したが、この稿を書き始めた四月中旬現在まだ手元はない。

日本色研配色体系（P. C. C. S）によれば、無彩色の明度段階を9段階に分けている。無彩色を11段階に分けて指導してきた筆者にとっては一寸ひっかかる所である。昭和47年特に小学校において11段階は複雑すぎるから数をへらし、それも「やや明るい」「やや暗い」などの言葉で表わしたことは知っている。日本色研配色体系の無彩色が、11段階から一つのまにか9段階にかわったことはどうした理由からなのか、筆者が調べた範囲内にはどこにもその記述がない。もどかしいのである。11段階であろうと9段階であろうと数が違うだけでどちらも明度の段階を示していることにおいて正しいのであるから、こだわる必要がないといえばそれまでである。

2. 色立体と一年生

新しい中学一年生に色立体を開けて見せる時の、あの生徒達の目の輝きは格別である。それはあたかも宝石箱を開ける時の心のときめきと未知の世界をぞきこむ期待に満ちている。「私たちのまわりには数えきれないほど多くの色が存在しています。この箱の中には750万から1,000万色に近い色数があるのです。」できるだけおおげさに、もったいをつけてから開けるのである。小学校の先生から初めて色立体を見せてもらう生徒は、クラスに一人か二人である。それだけに感動も大きいのである。色相・明度・彩度の3属性を3次元の立体に配置することによって生ずるあの魅惑的な階調は、子供の目を楽しませ心をおどらせ夢をさそう。

色立体を見て自分でも同じ色を作つてみたい衝動に駆られるらしく、色の授業が終るやきまつて数人の生徒がかけ寄つて来る。昨年など一人の女子生徒が本気になって「色立体を夏休みに作りたいから教えて下さい。」と云つて来た。中学生の暇と根気があれば色立体は作れると、かねがね確信しているが、未だ実現してくれる生徒はいない。結局この生徒も父親から「高校生でも手こする仕事である」とたしなめられ、休みあけに持参した作品は、四つ切画用紙に無彩色の明度

段階11色と24色相環を見事に描きあげてきたものだった。

ともあれ色彩の学習は中学生にとって絶対の魅力なのである。色立体を見る時に歓声をあげるのは、色相、明度、彩度の理屈はともかく、心地よく変化する色の調子（トーン）や、規則的に変化するグラデーションによる視覚的ショックが、子供達の生理的欲求を満足させてくれるからだというのオーバーだろうか。

3. 教科書の中の色彩

「色彩を体系的に指導することは、中学校の指導要項の精神ではない」ことや、4種の美術教科書の色彩の扱いがばらばらであることは、筆者昭和51年の研究発表「美術の基礎的学習から各領域への展開学習」の中で指摘した。それでは本年度より新採用された各社1年の教科書の扱いはどうか見てみたい。

中学一年 美術教科書に見る色彩の内容比較

教科書	色相環	明度段階	彩度段階	配色例
開隆堂	24色相	6段階の明るさの色の変化 (12色相)	なし	自然の中の色彩 類似と対照
光村図書	12色相	なし	なし	寒暖の配色 軽重の配色 類似、対照の配色
日本文教	12色相	6段階 (無彩色)	5段階 (あか)	寒暖の配色 軽重の配色 類似、対照の配色
現代美術	なし	なし	なし	生活の中で出合ういろいろな配色 (縞や和菓子)

色彩の基礎を学習する意味から云えば、色の三要素を平均してとりあげている日文が手堅いといえるが、色の明るさとトーンや、24色に及ぶ色環から来る色の豊かさを思えば開隆堂にひかれ。現代美術の生活の中からとりあげた観点はユニークだが、基礎的学習を考えると物足りない。

結局、いずれも一長一短があるのが教科書の特徴であろうけれど、筆者の願いは、どの教科書を誰が如何に教えようと、結果的に基礎的学習内容（事項を含んで）だけは、共通に指導できるものであってほしいのである。色の三要素の仕組みが理解できなければ色立体は想像つかない。少なくとも教科書と名のつくものなら一方に片寄らないものであってほしい。

美術の学習の中で、色彩理論ほど客観的な学習内容はない。この色彩まで指導者の主觀にゆだねてよいものかどうか、はなばだ疑問に思う。

日本色研配色体系（P. C. C. S）の色相は、オストワルドのカラーシステムの12進法に関連あるし、色立体の骨格は、マンセルのカラーシステムと同じである。マンセルの明度は、黒と白を理想の色として扱っているので色票として表示できず、9段階となっているが、日本色研は、黒と白を入れて9段階としている。

色彩体系をあれこれ詮索することが本稿の目的ではない。「どの体系によらなければ色彩教育はできないというものではない」ということも理解しているつもりである。少なくとも教科書が共通の色相名も入れることができないのは、正確な色印刷ができないことへの配慮なのか。日本人同志が、同じ色を見て、自分勝手な感じの呼称をしたらどうなるのか。これまで「だいだい」と呼んでいた色を「あかみのだいだい」、「きだいだい」を「きみのだいだい」といいかえるのならばそうとはっきりさせたい。教科書が逃げるから却って不安がつのるのである。

4. 本校における色彩の学習

本校では色彩に関する副読本は特に採用していない。指導者が扱う教具又は備品をあげると次のようになる。

- (1) 色立体 （日本色彩社） ここ20年近く使用しているものと考えられる
- (2) 透明アクリル製色立体 （日本色研） 5年前に購入した
- (3) カラースコープ （日本色彩社） 幻燈機にとりつけて色光の混合を見るもの
- (4) 色彩構成板 （日本色彩社）
- (5) 配色パネル （日本色研） 新規購入 昭和56年度より
- (6) 水張り用パネル 56cm×36cm 全校生徒一人一枚宛

(1)の色立体は旧来の木製のものだが長年の使用に耐えている。この立体は横断面を分解して見せる特徴があるが、縦断面は無理である。これを補うために発売されたのが(2)の透明アクリル板による色立体だが、取りはずしが簡単にできるとあるものの、接合部分が弱くてすぐに破損してしまう欠点がある。しかし近年その点改良されたと聞いている。

一方生徒が使用するもの又準備しているものをあげると次のようになる。

- (1) 色研ワーク （日本色彩社） B 6 50色
- (2) ターナーポスターカラー スクールセット12色
- (3) とき皿 （陶磁器）
- (4) ガラス棒
- (5) 面相筆
- (6) トーナルカラー トーン別いろがみ 65色 （日本色研） 昭和56年度より

(2)のポスターカラーは5年前から使用させている。色研ワークはポスターカラーを入れる前まで使用していたもの。(6)のトーナルカラーは久々のいろ紙採用となる。(3)及び(4)はじめ個人持ちとしたがうっかり落して割らす生徒が続出したので、最近は学校で一活備品とした。絵具皿は陶器製は理想だが、プラスチック製の方が現実的のようである。(5)の面相筆を悪用する例がある。即ち描画の時間に面相筆一本で仕上げようとする生徒が出ることだ。

さて本校におけるこれまでの色彩の学習についてであるが、一年及び二年においてその基礎的学習内容はおさえるようにしている。

●一年の色彩

- ① 色の三要素即ち色相・明度・彩度について学び、色立体の骨組みとの関連を知る。

- ② 有彩色・無彩色、12色環、24色環、補色、純色、清色、濁色の意味を知る
- ③ 無彩色の明度段階は11段階、合わせて「あか」の明度段階9段階、「あか」の彩度段階10段階

以上のことについて「色彩構成板」をフルに使って説明している。できるだけ生活の中に出合う場面を想起させながら、時には色研ワークの色紙や新聞の切り抜き等を手にとりながら学びとらせるようにした。

- ④ 以上の基礎学習をふまえながら自分のポスター色を使って色カードを作る。（作り方詳細は51年度発表「美術の基礎的学習から各領域への展開学習」を参照）

- ⑤ ④の色カードで平面構成をする。（内容については上に同じ）

④、⑤の実習は自づと色相・明度・彩度によるグラデーションの美しさを体得することになり比較的時間がかかるが有益な学習内容である。

- ⑥ 「自然形をもとに構成する」学習中の配色

野菜や果物を描く描画の学習がこの単元に関連が深く、色の学習とあいまって更に内容の濃い学習となって行く。ここで「類似した色による配色」「対照的な色による配色」の指導がなされる。類似による配色の単調さを「アクセント色」でひきしめることも忘れない。「グラデーション」という言葉を使わなくても無意識のうちに使う生徒が出てくる。勿論、寒色や暖色による「色の調子（トーン）」のこともふれなければならない。重い感じ、軽い感じの配色についても、作品鑑賞の時間に結果的に作品から受ける印象としてとりあげたことであった。

- ⑦ 時間が許せばポスターの学習に入ることもあった。詳細はポスターの学習で後述する。

●二年の色彩

「色の対比」については二年又は三年で扱ったが、主にグラデーションによる配色を構成学習の中で扱うようにした。どうしても一年の学習の復習のようになりがちであったが、むしろポスターの指導に主力を置くようになった。「進出色」「後退色」についても一つの知識として義務的にとりあげた年もあったが、色の対比と同様、実技の内容と具体的に結びつかず、やはり一年で学習する基礎的学習の強さと大切さを思い知るのである。

5. 色を「トーン」として把握する

一年生が色立体を見てどうして感動するのかもう一度考えてみたい。彼等はある色を識別するのに、これはどの色相で、明度は何度くらい、彩度はどのあたりなど三つの属性など意識しないはずである。明度と彩度を一つのまとまったものとして直感的に感じとるもの、つまり「色の調子（トーン）」として把握しているはずである。「明るい色」「暗い色」と呼ぶ明るい、暗いは色のトーンの形容詞である。生徒は明るい色を「うすい色」と呼ぶことがある。筆者は「うすい色といわず明るい色といいなさい。」と云ったことがある。しかし「うすい」も立派な形容詞だったのである。

日本色研配色体系（P. C. C. S）によれば、このトーンの形容詞と相互関係及びトーンの位置とトーン名をわかりやすく図示している。最近求めた日本色研の「トーナルカラー」のビニール袋の裏面にもこの図が「トーン別分類表」としてのっている。

これまで「純色」「明清色」「暗清色」など一つ覚えの言葉を伝えるだけで生徒にわかつてもらえたように思っていたが、随分不親切な指導をしていたようだと最近反省している。

図1 トーンの形容詞と相互関係

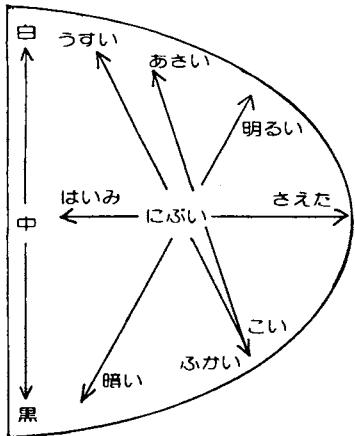
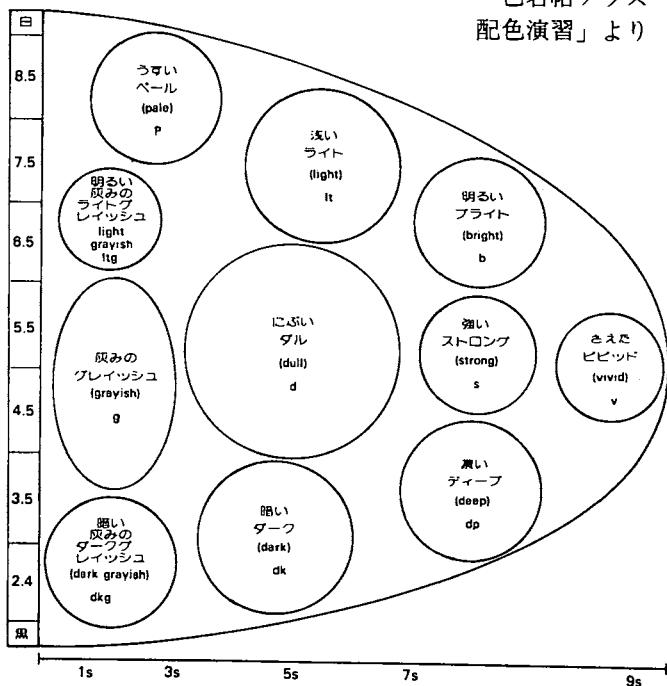


図2 トーンの位置とトーン名

「色名帖プラス
配色演習」より



例えば赤の色相のトーンをとりあげてみよう。赤の純色に白を混ぜるとこの赤はやや明るくなり同時に彩度もやや低くなる。このような赤を一般に「明るい赤」と呼ぶ。この赤にさらに白を加えると色はもっと明るくなる。だが赤の色みはもとっとうすくなる。この時の赤を「うすい赤」と呼ぶのである。また純色の赤に黒を少し加えるとやや暗い赤となり、赤の色みもやや弱くなる。この赤を「濃い赤」と呼ぶ。更に黒を加えた赤を「暗い赤」と呼んだのである。

これらトーンを形容する詞は対照の位置にあるトーン同志を反対語で言い表わすようにできているので覚えやすい。

といっても、これら形容詞はあくまでも図表の上での言葉であり抽象的である。その点「トーナルカラー 5色の色組表は8つの同じトーンのグループ分けをし、それぞれの仲間に65色を組分けしているのである。これは類似・対照の配色にも便利であり、生徒の理解を早めるためにも、真に当を得た編集である。

この色組表を見て注目させられたことだが、例えば「さえた色のなかま」に「あさぎいろ」「やまぶきいろ」、「うすい色のなかま」に「ふじいろ」、「あかるい色のなかま」に「さんごいろ」「わかたけいろ」、「こい色のなかま」に「えびちゃ」「ききょういろ」「くらい色のなかま」に「てついいろ」、「にぶい色のなかま」に「とびいろ」「かれはいろ」、「あかるいはいみの色のなかま」に「うめねず」「ぞうげいろ」など、日本の伝統色が組み込まれていることである。

わが国では、古来より現代に至るまで、生活の中に息づく日本特有の色彩感覚がある。自然のもつ微妙な色のちがいを固有色名で表わし親しんできたはずだが、言葉は知っていても、実際どの色をさすのか一向結びつかないというのが大人の我々である。まして子供においては、今我々が色彩を指導して行く上で、この文学的にもすばらしい感覚を伝えずにおれようか。大きな責任

すら感ずるのである。幸い開隆堂発行の今度の3年の教科書には、先にあげた日本の伝統色のほとんどを2ページをさいてあげていることは賢明であった。

「さえた」 \longleftrightarrow 「灰みの」 \longleftrightarrow 「うすい」 \longleftrightarrow 「こい」 \longleftrightarrow 「明るい」 \longleftrightarrow 「暗い」そして「にぶい」等の対照的な言葉と共に具象的な「日本の固有色名又は古代色名」を読みながらその色のトーンを感じ、かつトーンの位置を確認していくという多角的な学習の方が生徒の興味をそそり、強く学習の場を印象づけると考える。

5. 本校におけるポスターの学習

伝達のためのデザインの一つポスターは、色の学習で培われた成果がそのまま、反映される学習といって過言ではない。ポスターは必ず「アイディア」には違いないが、配色から受ける感じの良し悪しが、ポスターの伝達生命を大きく左右するのである。

生徒が描くポスターは、とかく色々な企業や団体から利用されやすい特質がある。やれ何々運動だの何々週間だ、コンクールだのと数えあげればきりがない。

本校では、校内ポスターから手がけた。身近かな問題、自分達の行事を呼びかけるポスターでなければ意味がないと思った。「廊下を走らない」「手を洗おう」から「運動会」「文化祭」だった。廊下や洗面所に掲示する呼びかけのためのポスターは、文字だけの即ちレタリングの基礎学習の一端として設けた。

① 切り絵式ポスター

ポスターカラーを生徒に持たせることは、経費の上からも、表現技術の上からも低抗があつてなかなか踏みきれず、時間数も少なくてすむ「切り絵方式」を取った。紙のステンドグラスでよくやる黒地の画用紙を切り抜いて文字や図板を浮き出し、部分的に水彩絵具で彩色する方法。逆に、白地の画用紙を切り抜いて文字や図板を浮き出し、その部分を色がみでうめ飾り、部分的には描画的な手法をとらせたりした。結構それでも初期の目的は達せたものの、やはり色は色がみの色、ポスターカラーの鮮明さには及ぶべくもない。美術はお金のかかるものと割切るべきものか。

思いきってポスターカラーを個人持ちさせたのは5年程前からである。案ずるより産むが安し一年生でも二年生でも結構使いきるのである。

② ポスターカラーによるポスター

ポスターカラーを使い慣れないうちは、普通の水彩絵具のように使う。程よい濃さにとくその加減を体得させるまでには相当やかましく云わねばならぬし、時間もかかる。生徒というものは両極端に行くものである。水を多く入れすぎるか、全く少なすぎるどちらかである。絵具皿をかたむけた時、とろりと流れだすくらいがよろしいと云うのだがなかなか伝わるものではない。

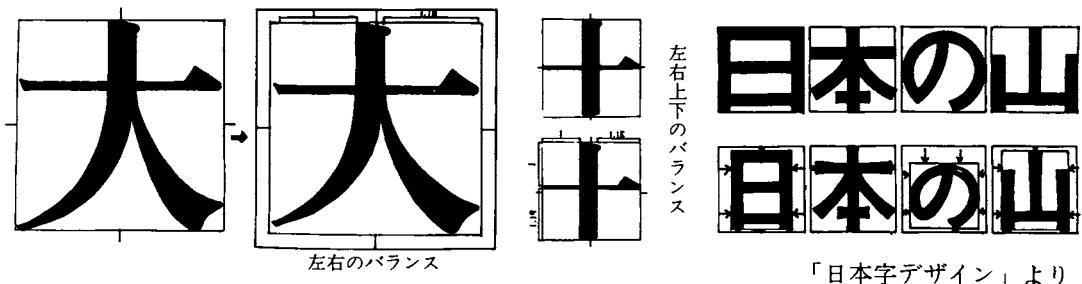
地の色を前もって一面に塗ってから文字や図柄を書き加える方法もあるが、どうしてもあとからかけた色の発色がにぶるようである。

ポスターカラーには、やはり画用紙をパネルに水張りさせてからの方が仕事がスムーズに行く。水張り用テープが市販されている。やや高価だが、作業能率からいえば重宝なものである。一クラス一斉に水張りするにはどうしても一時限必要である。

③ レタリングについて

文字のデザインの基礎は、何といっても印刷活字の明朝体とゴシック体であろう。筆でかいた書体から生まれた明朝体の特徴、欧文の書体をもとに作られたゴシック体の表情の違いなどどうしても触れておかねばならない。ただし特に明朝体にはおさえやはねの角度や丸みに特別な約束があることは強要する必要がないが、一つの知識として話しておいても無駄ではないようだ。ゴシック体の各画の始めと終りは太めにすることの骨は教えておかねばならない。どちらの書体もあとは模倣で結構なのである。

どうしても押えておきたいことがある。「つりあいを考えてかく」ことである。筆者はこれまで「大」と「十」の漢字を例に、縦棒を少し左に寄せるとか、横棒を少し上にあげるとつりあいがとれることを云って来た。また「日本の山」の四文字を並べて、画数の少ない漢字やひらがなは大きく見えるから小さめに修正して全体のバランスをとらねばならないことをとりあげて来た。同じく開隆堂版1年の教科書に「十」と「上」そして「日本人」を並べて同じ指摘がされており我が意を得たりの感を深くした。



「日本字デザイン」より

本校の新入生には、美術科・技術科両用の作業服を揃えさせているが、胸ポケットの位置に、氏名を書き入れない校章入りの札を縫いつけて持参させ、美術の時間に油性サインペンで、明朝体による自分の姓をレタリングさせている。文字のデザインに親しませる初步的な試みである。

④ 世界連邦ポスター

世界連邦建設同盟が主催する世界連邦ポスターコンクールは、規模こそ小さいけれど、全国中小学生を対象としたコンクールである。子供達が一人でも多く世界の平和を願うきっかけにでもなればという純粋な気持から、近年2年生の作品を応募し続けている。

はじめは「きり絵式」で応募していたが、やはりポスターはポスターカラーなのかと挫折の念にとらわれたこともあるが、年々生徒の方に制作意欲が湧いてきており、逆に励まされている。

このポスターを指導していくことだが、導入段階そしてアイディアを練る段階は、ちょうど構想画を練る段階に似ていることである。資料探しには充分時間を取ることにしている。学校の図書室で2時限から4時限迄資料探しに没頭する生徒が多い。一人一人ははなはだ面倒だが、クロッキー帳に描かれたアイディアスケッチを見ながら感想を云ってやったり、構成の手立てに相談に乗ってやることが最も大切な役割であると考える。あとは配色計画の際相談に乗ればいいので、ほとんど手ばなしの状態である。

配色計画も、グラデーションの効果をねらう子が多いのは、基礎的学習の影響であろう。濁色と純色によるバランス、図柄と文字がダブってしまってお互い殺し合わないようにすることなど

気を使っている。

世界連邦といえばすぐ連想するのは、世界の国旗であり、世界地図である。地球儀が発展して宇宙戦争にまでなる。子供達の通常なアイディアにできるだけ新鮮な風を送り込むため、特にアイディアが浮かばないで苦労している生徒には「自分の足元を見つめよう」と話しかけ、自分は何クラブ（部）に入っているか、自分の得技で世界の子供達と手をつなぐことを考えてみようを持ち出してみることがある。トランポリン日本一で世界大会にまで出場した女子生徒がいた。彼女もアイディアが一向浮かばず一時間悶々としていた。見るに見かねて「君のトランポリンでやれ！」と命ずるように云うと、急に彼女の顔が明るくなった。思い切り宙に飛びあがる自分を、世界の子供達が円陣を組んで見守ってくれる素晴らしい図柄であったが、文字の位置と配色に難があって残念した作品の一つであった。

このポスターは文字の入った絵画表現と思うことがある。それだけに他のデザインと違って最も自己主張が強くはっきり出る表現となっている。

一昨年、特選を射止めた女子生徒が、次のような感想を書いている。

（前略） 実を言うと私は絵が下手なのです。せっかく良い案が浮かんできたとしても、色塗りをしている間に絵の具が線よりはみ出したり、ジワーッとにじんだりするのです。細かなところでは、気を落ちつけているつもりでも、指先が勝手にふるえてしまうのです。友達がなめらかにスープと一緒に描けるところを私は何度塗り直したことでしょう。放課後、大勢の友達と一緒に描いていたのですが、二日目、三日目になると、「出来た！」とうれしそうな顔で友達が美術室を出て行きます。次々と仕上げて行く友達の背中をうらめしく見つめては、色を合わせる、思った色が出ない、考える、次の色を重ねてみる、そんな繰り返しでした。白で“ONE WORLD”的な文字をピシッと決めたかったけれど、無器用な私には無理だったのでしょう。ちょっと不細工な形になりましたが、完成されたものは満足でした。全力投球したというのは、あの感じのことではないかと思います。（後略）

彼女が自分で書いているように、ポスターカラーを扱う技術面には問題があった。しかしそれを吹き消す程に後で見てもアイディアが抜群であったし、平和を象徴する緑系の暗青色から黄緑にいたるグラデーションの美しさは新鮮な印象を与えた。そして美術の時間とかく塗りの技術面で劣等感を抱いている生徒へ大きな力と光明を与えてくれたのである。

6. おわりに

色彩の学習が、ポスターの学習にかかわる問題を考えてきた。良い色彩感覚をつけ、素晴らしいデザイン能力を発揮できる生徒を一人でも多く育てるために、今一度、本当に基礎的な色彩の学習は何か、そしてそれにつながる構成と配色の練習の課題はどんなものが良いか、その発展学習の一つとしてのデザイン・ポスターのあり方を、もっともっと別の実践を通してつかみたいものである。コンクール応募は確かに一つの励みにはなる。何が何でもコンクールのために、それがすべてというのではなく、コンクール応募を上手に活かしたポスター指導のあり方も研究に価しよう。

〈参考文献〉

- | | | |
|-------------|--------|------------|
| 色名帖プラス配色演習 | 河原 英介著 | 有峰書店 |
| 色彩理論とデザイン表現 | 谷 欣伍著 | アトリエ出版社 |
| 色彩教育指導書 | 真鍋 一男著 | 日本色研事業株式会社 |
| 色彩 造形のたのしさ | " | " |
| 日本字デザイン | 佐藤敬之輔著 | 丸善株式会社 |